

鞠智城の調査成果

矢野 裕介

ただ今、御紹介いただきました、熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の矢野と申します。よろしくお願います。

私のほうからは、「鞠智城の調査成果」ということで、国史跡「鞠智城跡」の、昭和四二年度から続く発掘調査における、これまでの成果を中心にご報告させていただきます。

一 概要

まず、鞠智城について簡単にご説明します。鞠智城は、『続日本紀』文武天皇二（六九八）年五月の条、「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕い治めしむ」との繕治に関する記事を文献上の初見とします。残念ながら、築城に関する記録は残っていませんが、これによれば、『日本書紀』天智天皇四（六六五）年に築城された大野、基肄の二城と同時に修理されたということですので、これら二城と同時期に築城されたと考えられています。その後、平安時代に入り、『日本文徳天皇実録』

天安二（八五八）年二月・六月の条に、「肥後国申す、菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴る」という奇怪な事件が伝えられています。そのうち、六月の条には、去る五月に「不動倉十一字を火く」という不動倉焼失に関する記事があり、続いて『日本三代実録』元慶三（八七九）年三月の条にも、「菊池郡城院」の「兵庫の戸が自ら鳴る」という報告があり、これを最後に文献上から姿を消しますが、これまでの間、少なくとも一八一年間、鞠智城が存続したことがわかっています。この六国史に記録として残る「鞠智」、「菊池城院」、「菊池郡城院」の遺跡が、鞠智城跡です。

鞠智城跡は、熊本県の北部、福岡県との県境を限る筑肥山地の主峰、標高一〇五二メートルの八方ヶ岳の南西麓、小河川や浸食谷により起伏に富み入り組んだ丘陵地帯の南端近くに位置します。南には阿蘇の北外輪山から有明海へと西流する菊池川が流れています、その河口より直線距離で

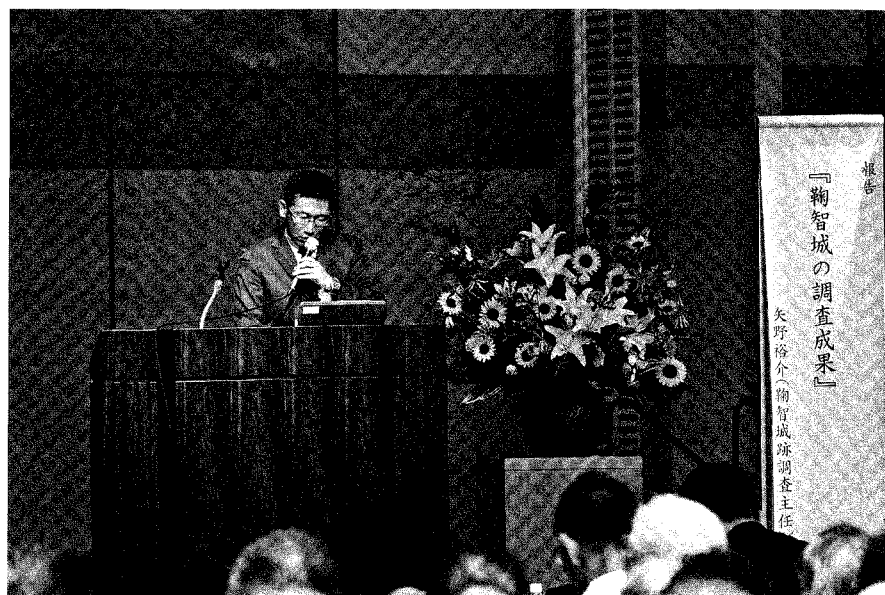


写真 4 報告中の矢野裕介氏

約三〇キロメートル上流の中流域にあり、南の平野部との比高差一〇〇メートル程の低丘陵上に立地しています。現在、古代の律令国家が編纂した六国史の記録が残る「朝鮮式山城」が六城（うち、高安城は比定地）、六国史に記録がない「神籠石系山城」が一六城、計二二城が北部九州から瀬戸内海沿岸、畿内にかけて分布していますが、それら諸城のうち、鞠智城跡は、現在のところ最も南に位置します。

鞠智城跡の城域は、古くから広域説、狭域説など諸説論じられてきましたが、現在では、狭域説の範囲をさらに区画して、中心標高一四五メートル前後の、通称「米原台地」を中心に、北と南に二つの谷を取り込んだ、周長三・五キロメートル、面積五五ヘクタール、標高九〇（池ノ尾門跡）（一七一メートル（シャカンドン））の範囲を内城地区と呼称し、真の城域としています。

鞠智城跡の大きな特徴として、大野城跡、基

表1 六国史にみる鞠智城

※書き下し文	
「甲申、大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕い治めしむ」	
『続日本紀』文武天皇二年五月二十五日条	（六九八年）
「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」 「丁巳、又鳴る」	
『文徳実録』天安二年二月二十四・二十五日条	（八五八年）
「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」	
「同城不動倉十一宇火く」	
『文徳実録』天安二年六月二十日条	（八五八年）
「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」	
『三代実録』元慶三年三月十六日条	（八七九年）

肆城跡と比べ、中心標高一四五メートルと非常に低い場所に立地していますが、そうでありながら、北東方向に八方ヶ岳、南東方向に阿蘇北外輪山の鞍岳、南西方向に熊本市西部の金峰山系が見渡せるなど、それまで視界を遮る山稜等がない眺望の開けた場所に立地しており、城としての適地に築かれた様子がわかります。

現在の行政区分では、山鹿市菊鹿町米原・木野から菊池市木野にかけて所在します。古代律令制下では、肥後国菊池郡になります。「木野」という地名ですが、平安時代中期に編纂された『和名類聚抄』にみえる菊池郡内の「城野郷」に因むものと考えられています。鞠智城跡の北西側に所在する、「大同二年（八〇七）山城国葛野郡_{内式}松尾神ヲ勧請」したとされる「城野松尾神社」がその名残りをとどめています。

二 調査の成果

鞠智城跡の発掘調査は、昭和四二年度の第一次調査から

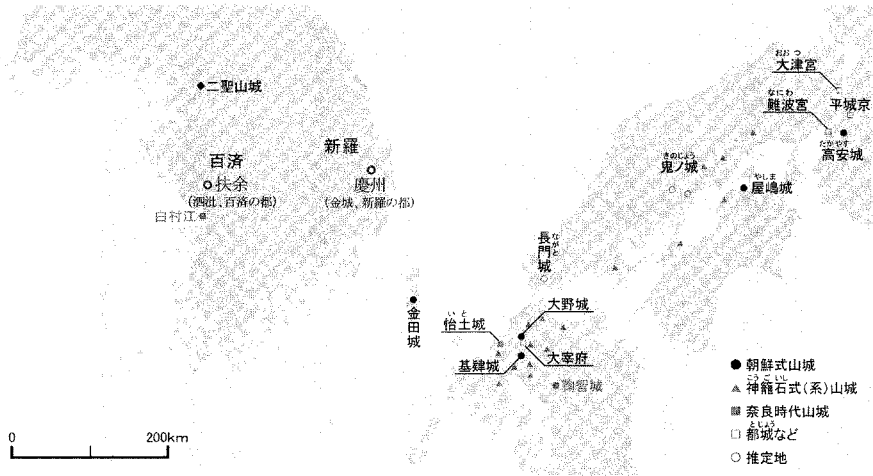


図1 古代山城分布図

始まり、今年度で三二次を数えます。これまでの調査で、七二棟の建物跡をはじめ、城門跡、貯水池跡、土塁跡、水門跡を検出するなど、全体構造の解明が進むとともに、百済系の銅造菩薩立像、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、木簡（「秦人忍□五斗」）など、築城の背景及び城の機能を推察できる遺物も出土しています。

（一） 建物遺構

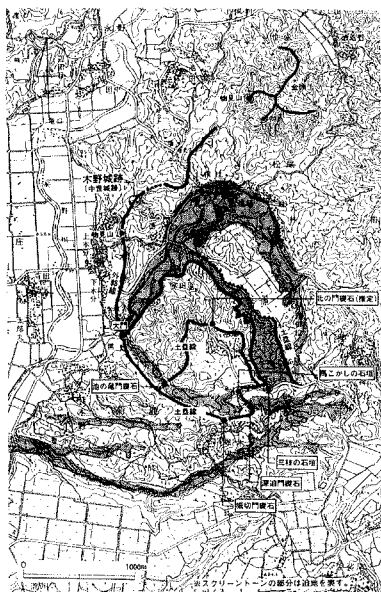


図2 鞠智城跡周辺図



写真5 鞠智城跡全景

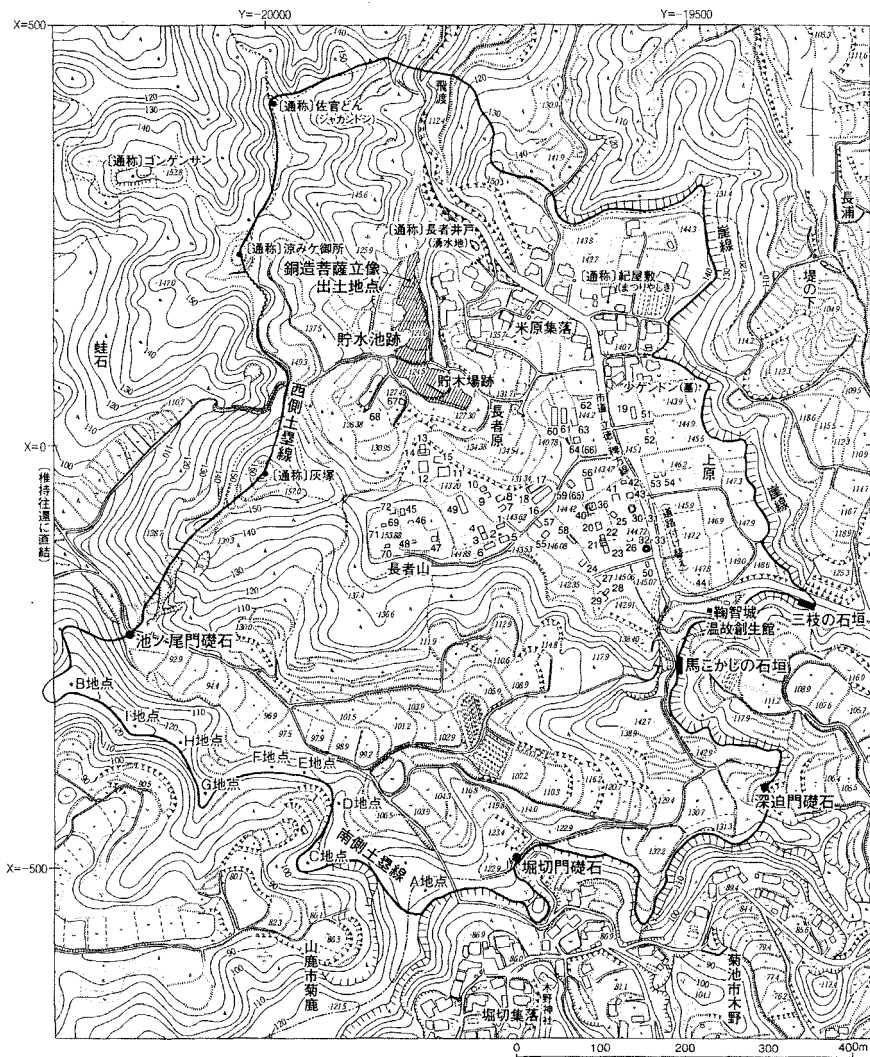


図3 鞠智城跡全体図（大田 2009 より転載）

現在、城の中核域となる長者原地区を中心に、七二棟分の建物跡が見つかっています。その内訳は、掘立柱建物跡四七棟、礎石建物跡二五棟で、建物規模、柱配置、柱間寸法によりさらに細分化されます。鞠智城跡では、これらの建物跡が整然と並んでいます。

掘立柱建物跡は、建物形状がわかるもので、総柱建物一六棟、側柱建物二六棟を数えます。側柱建物には、三間一〇間の建物跡（一六号）、一面庇の建物跡（二四、二七号）があります。

一方、礎石建物跡はすべて総柱建物で、三間九間の長倉形式の建物跡（四九号）や、礎石・掘立柱併用建物跡（一一、一二、二九号）があります。このほか、鞠智城跡を特徴づける建物として、八角形建物跡があります。国内の古代山城では唯一確認されている建物跡で、約五〇メートルの間隔で南北に配置されています。心柱を中心に柱が環状に配置される構

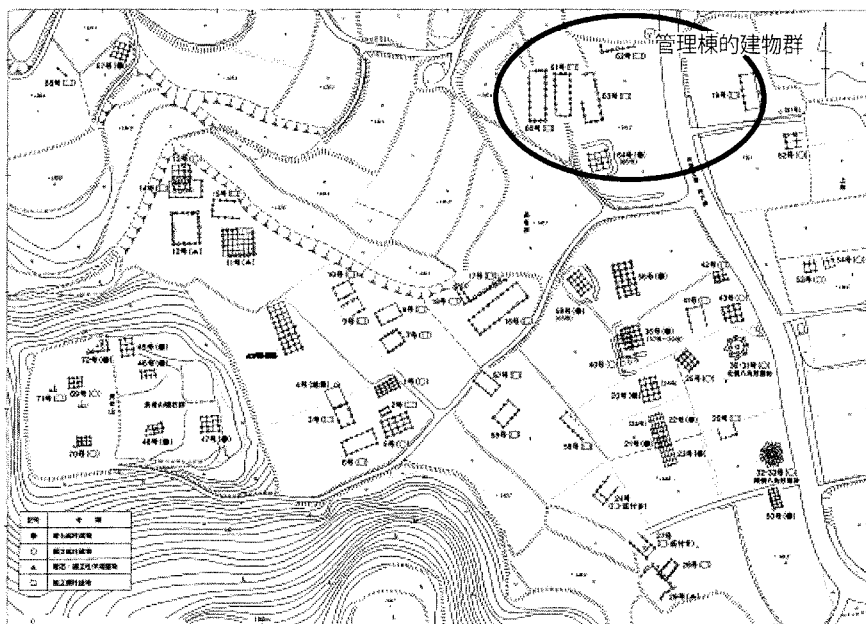
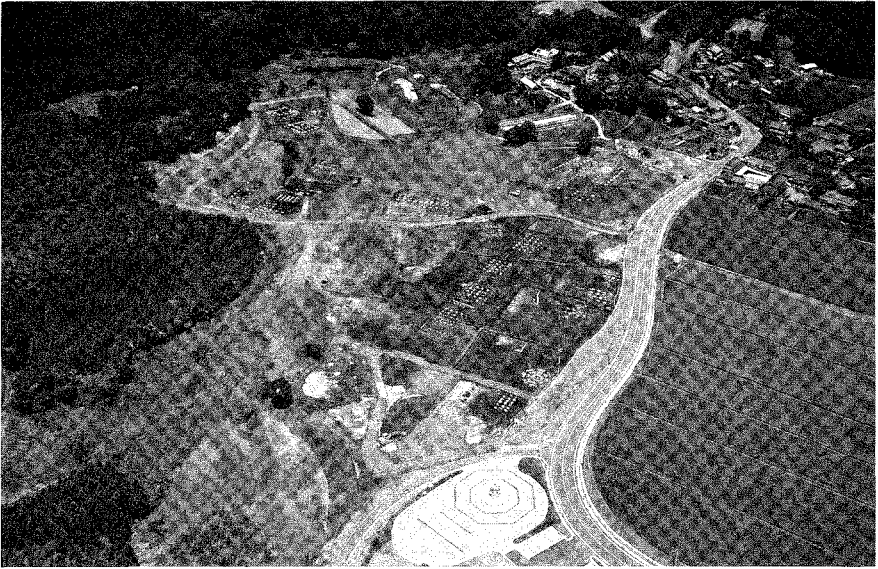


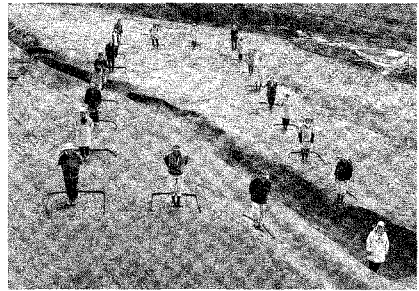
図4 長者原地区 建物検出状況（大田 2009 より転載）



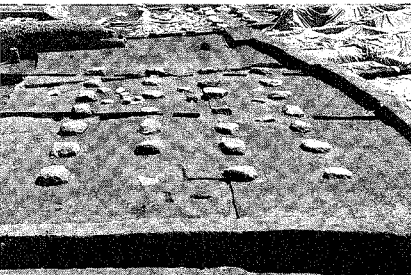
長者原地区完掘状況（平成9年度撮影）



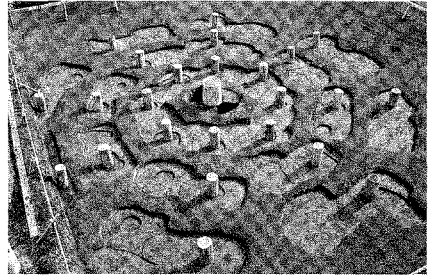
49号建物跡（西から）



60号建物跡（北から）



56号建物跡（北から）



八角形建物跡（北から）

写真6 長者原地区の主な建物跡

造で、南側が三重に、北側が二重に柱が巡ります。

また、長者原・上原地区の北側には、南側を溝で区画するコ字形配置の建物群（一九・六〇～六六号）が見つかっており、「管理棟的建物群」と位置づけられています。城の管理・運営を担った中枢施設と考えられています。

現在、長者原地区は遺構を埋め戻し、盛土をした上で、建物を復元する等の整備を行っています。

（二）城門遺構

城域の南側、深迫、堀切、池ノ尾の三箇所、門礎石の存在から門跡が推定されています。門礎石はいずれも掘立柱形式のもので、上面の縁近くに門扉の軸を差し込むための直径一六～二〇センチメートル大の凹形の軸摺り穴が空いています。うち堀切門礎石は、一石に約二・八メートル間隔で両扉分の軸摺り穴が空いており、礎石の縁には柱を当てるための凹形の削り込みが認められます。残念ながら、いずれの門礎石も原位置から動いており、現在のところ、堀切門礎石の位置を推定しただけで、門構造の解明にまでは至っていません。

城域東の谷頭付近に位置する深迫門跡では、これまでの調査で、門口を境に、直角に配置された版築土塁が確認されています。また、城城南のほぼ中央に位置する堀切門跡では、阿蘇溶結凝灰岩の崖地を堀切状に切り通して造り出した、L字形に屈曲させた通路と、その東側に、上段を削りだ



写真7 単弁蓮華文軒丸瓦

し、下段を盛土により整形した二段構造の城壁が確認されています。堀切門跡の通路は、側溝を伴い、粘土を貼って整形しています。

最後に、城域の東側、谷部に位置する池ノ尾門跡では、鞠智城跡で唯一、水門が見つかっており、幅九・六メートルの石積み
の城壁の下部を、幅約七〇センチメートル、深さ約七〇センチメートル以上の暗渠状の
通水溝が通っています。また、取水口の前面には、水を取水口に導くための導水溝も
見つかっています。

このように、城門周辺の城壁については、それが立地する自然地形に応じて様々な工
法で構築されたことが判明しています。

このほか、城域北側の「飛渡」にも、地
形的な理由から門跡が想定されています。



深迫門礎石（東から）



堀切門通路（北西から）



池ノ尾門通水溝（東から）



堀切門通路（北から）

写真 8 城門遺構

(三) 土塁線

城域の南縁、西縁の城壁線上に、土塁的景観を色濃く残す尾根があり、それぞれを南側土塁線、西側土塁線と呼んでいます。これまでの調査で、これら土塁線上から、大陸伝来の版築による土塁がみつかっています。

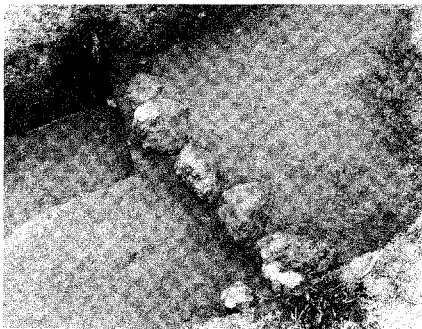
南側土塁線では、その西端部で南面が崖地となる馬の背状の尾根上に残存高約五・〇～八・〇メートルの二段構造の土塁が見つかりました。土塁の盛土は、赤と黒色の粘土層の互層盛土で、土塁裾には、土留めのための列石も検出されました。その後、東端部でも土塁の盛土が確認されたことから、総延長約五〇〇メートルの土塁線すべてに土塁が構築された可能性が推定されま



西端部（東から）



西端部 版築状況（北東から）



石列（南東から）



堀切門通路（北から）

写真9 南側土塁線

した。

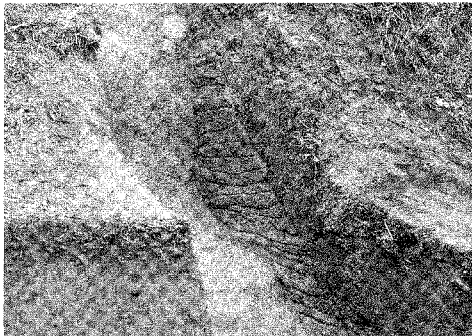
一方、西側土塁線においても、その北端部のシャカンドンにおいて、推定高約三・六メートル、裾部に石列を配する土塁が見つかっています。ここでは、土塁前面と背面に版築のための支柱穴と考えられる柱穴列も確認されました。

このほか、城壁線上には、「馬こかしの石垣」、「三枝の石垣」という二つの石積みが認められますが、現在のところ、後世の構築と考えられています。

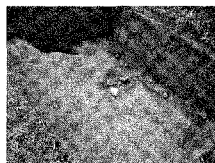
(四) 貯水池跡

貯水池跡は、城域の北側谷部に位置する池遺構で、谷地形に沿う南北に長い形状になります。水成粘土堆積層の掘りから約五三〇〇平方メートルの規模が推定されています。

これまでの調査で、水が枯渇しないように別の小谷から水を取り入れる取水口、取り入れた



盛土断面（北西から）



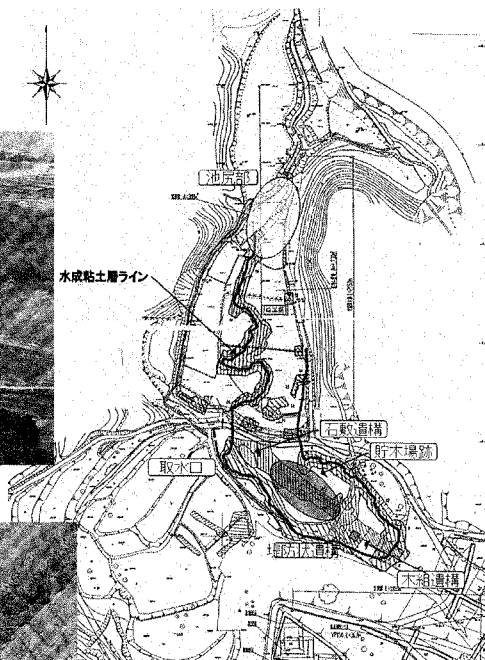
盛土と列石（北西から） 前面柱穴列（北東から）



北端部（北東から）

写真 10 西側土塁線佐官どん地区

貯水池跡全景（北西から）



貯水池跡全体図



貯木場跡（南東から）



1号木簡



木組遺構



池尻部（北から）

写真 11 貯水池跡

水の勢いを弱めるための石敷遺構、建築部材等を水漬けした貯木場跡、水汲み場となる木組遺構、池の中途に設けられた堤防状遺構、池の周りに設置された柵跡と考えられる柱穴列、池の流末となる池尻部等が見つかっています。遺物としては、「秦人忍□五斗」銘の木簡などが出土しています。主として湧水を貯め、中途に小規模な堰堤を設けることによって水量を調整する貯水構造が明らかとなっており、飲用水はもとより、建築部材等の貯木など多岐に亘る用途が推定されています。

また、池尻部の最下層からは、全高二・七センチメートル（像高九・七センチメートル）の銅造菩薩立像が出土しており、その形態的特徴から七世紀後半の百済系仏像であることが指摘されています。さらに、菩薩像が捧持する持物についても、円筒形の舍利容器と考えられています。

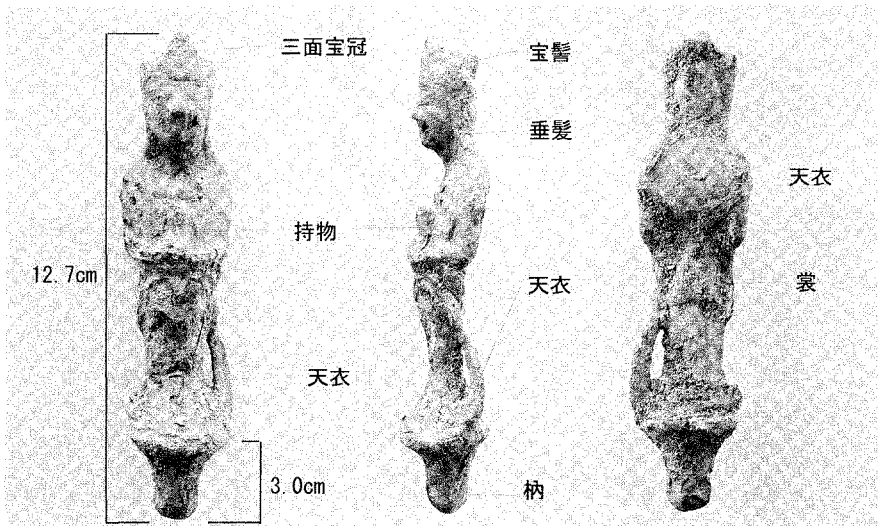


写真 12 百済系菩薩立像

三 建物遺構の時期区分と変遷

これまでの調査成果と建物方向、一部の切り合い状況に認められる掘立柱建物跡↓小型礎石を伴う礎石建物跡↓大型礎石建物跡の変遷をもとに、建物遺構の時期区分と変遷について整理を行ったところ、長者原地区西側一帯の建物群を除き、次の三期の時期区分と変遷が考えられました。

まず、第Ⅰ期ですが、創建期あるいはそれに近い時期に推定されます。北にコ字形に配置された大型掘立柱建物群を置き、その南側一帯と長者山に掘立柱建物の倉庫を配置するなど、古代山城としての機能が整った段階となります。八角形建物もこの時期から存在したものと考えられます。(一九・二六・三一・三二・三五・四〇・四二・四三・五二・五四・六一・六三・六九・七

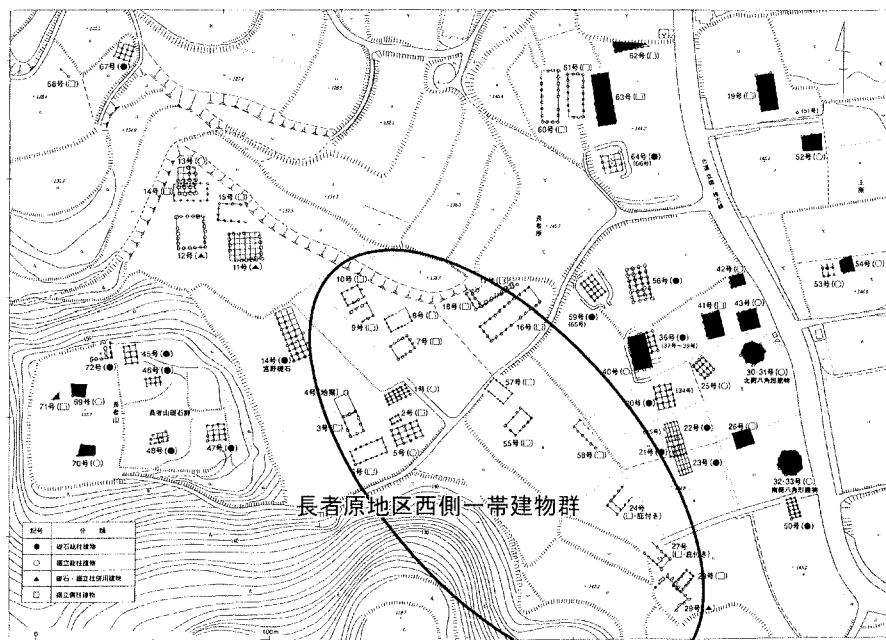


図5 建物遺構変遷図(第Ⅰ期)

○・七一号が該当)

次の第Ⅱ期ですが、第Ⅰ期の建物配置を踏襲しながら、一部に掘立柱建物から小型礎石を伴う礎石建物に建て替えが行われる段階となります。時期的には、八世紀前半に推定されます。(二二・二三・三四・三七・五

○・六五・六六号が該当)

最後の第Ⅲ期は、小型礎石を伴う礎石建物が大型礎石建物に建て替えられる段階で、八世紀後半から鞠智城の終末期までの時期に推定されます。側柱に掘立柱を伴う礎石建物が出現するなど、鞠智城の構造、性格に変化が生じる段階と思われます。(二一・一二・一三・二〇・三六・四五・四六・四七・四八・五六・五九・六四・七二号が該当)

以上が、現段階における建物遺構の時期区分と変遷案ですが、現状では、長者原地区西側一帯の建物群の時期的位置づけや礎



図6 建物遺構変遷図(第Ⅱ期)

石建物の出現時期など、出土遺物との整合性が図られていない部分も多くあり、今後、遺構・遺物のさらなる精査により、建物の消長も含めて具体的な検討を加えていく必要があります。

四 今後の課題

鞠智城は、文献上、少なくとも一八一年間存続した城であり、この間、幾度となく補修、改築等を繰り返しながら城を維持してきたと思われます。そのため、鞠智城の役割・性格を考える上で、その時期区分と変遷を解明することは、きわめて重要な作業といえます。

今後、より具体的な検討を加え、他の遺構の構築年代も含め、鞠智城の全体像を明らかにしていきたいと思っています。

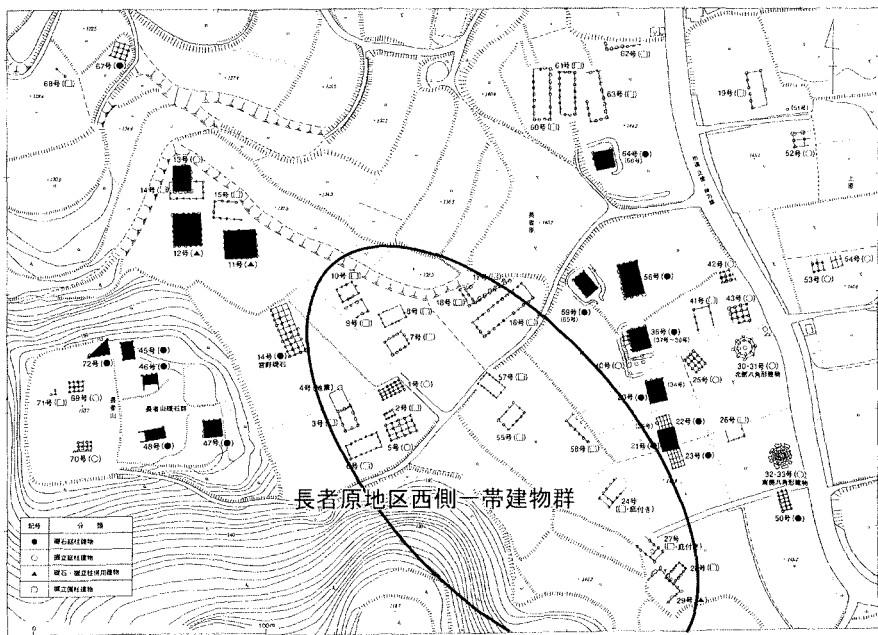


図7 建物遺構変遷図(第Ⅲ期)

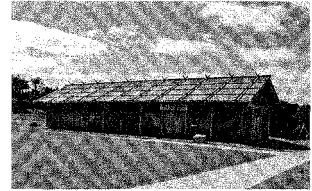


八角形鼓楼

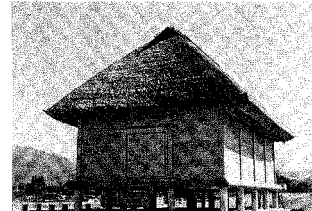
写真 13 復元建物



米倉



兵舎



板倉

以上で、「鞠智城の調査成果」についての報告を終わります。
ご清聴、どうもありがとうございました。